

「ラジオ放送」

主任司祭 晴佐久昌英

キリスト教ラジオ放送局・日本F E B Cにて、半年間にわたり「あなたに話したい」という番組を担当してきたが、ようやく全二十六回分を録り終えることができた。なんとかこの日を迎えることができて、心の底からほっとしている。

ひとことで言って、つらかった。本当につらかった。今まで大抵のことは、なんだかんだ言いながらも何とかこなしてきた。しかし、このラジオの仕事だけはどうにもならなかった。収録の前日になると気が重くなり、当日はどうしてもスタジオに向かえない。不登校の子供の気持ちをしみじみと味わうことができた。

何がそんなにつらかったのか。おそらく、目の前にだれもいないのに語りかけるという状況が、ぼくには向いていなかったということだと思う。スタジオでマイクを前に「あなた」への福音を語るということにこれほどの不全感があるとわかっていたら、決して引き受けなかっただろう。自分が普段は、目の前の具体的な「あなた」に反応しながら福音を語っていたのだということは、ある意味で発見だった。相手の今の状況、今の悩み、その一瞬の表情、それらがぼくから福音を引き出していたのだった。

ラジオ局の人は見かねて、「だれかが目の前にいると想像してみては」とアドバイスしてくれたが、恐れに囚われたぼくには逆効果だった。その「だれか」は、ぼくの話をつまらなさそうに聞いたあげく、スイッチを切るのだから。

おかげさまで、最近は直接相手と向かい合える現場の尊さが身にしみて感じられるようになった。ごく普通にだれかと話していても、生身の相手が目の前で「うん、うん」とうなずいてくれるだけで感謝の念に満たされる。説教でみんなの顔が一瞬輝くとき、胸が熱くなる。

実際には、ラジオを聞いている大勢の人にもまた、そのようにうなずいてくれているのだろう。あとはそれを信じて、ぼくが苦しんだぶん、「あなた」の顔が輝くことを願うばかりである。

「みなさん、ごきげんいかがですか。晴佐久神父の『あなたに話したい』の時間です。一週間、いろいろ大変でしたね。でも、安心してください、神様は本当にあなたを愛しています！」